
あの空まで届け

雨宮 傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空まで届け

【Nコード】

N5499P

【作者名】

雨宮 傘

【あらすじ】

私の好きな人、田端先生は、クラスの生物担当の教師。生徒でもいい、先生と親しくなればいい、そう思っていたけど。やっぱり私は、先生のこと大好きみたいです。

先生に密かな想いを寄せる宮城 遙と、教師の田端 孝介との恋愛物語。

体育祭を機に、親しくなる二人。

しかし、立場上この想いは、自分だけの秘密。

新しいHP作りました (><)
作りたてですけど。

雨宮 傘のページから、いけるはずですよ…。
よければどうぞー！

プロローグ（前書き）

初めて書くので下手ですが、長い目で見ていただけたら光栄です。

プロローグ

晴れた日の午後。窓から入ってくる陽射しで、教室はほんわか暖かかった。

もうすぐ秋分、そろそろ肌寒くなってきてもいい具合なのに、冷たい風は入ってこない。

そのせいだろう、授業では、大半の生徒がうたた寝をしている。

そんな中私は、襲いかかる睡魔と闘いながら、前を見つめる。

だからといって、私は、優等生というわけではない。そこそこ真面目で、そこそこの成績。もちろん、いつも集中して授業を受けてもいない。

けど、この授業だけは、私は優等生、だと思う。

どうしても、真面目に受けたい理由がある。

それは私の視線の先…

生物の先生、田端孝介に見てもらいたいから。

私、田端先生のこと、好き、なんです。

授業中、この言葉を何度繰り返したことが。気付くとノートに書かれている、告白。

もちろん相手に伝えることなんて出来ない。でも、せめて好印象な生徒になりたい。

田端先生がいると、そこはいつでも、どことなく温かい。それは多分、彼が温かい人だから、だと思っ。その心地よさのせいか、いつのまにか私は……………。

先生と初めてあつたのは今年の四月。

中高一貫制のこの学校では、卒業生を送った教師が、中等部から高校に移動になることがたびたびある。

田端先生もその一人だった。

私達の教室に入った先生が教壇に上ろうとした瞬間、突然の衝撃音。

ふと前を見た時には、チヨークの粉まみれの彼が、恥ずかしそうに笑っていた。

「こんな登場の仕方は嫌だったんですけどね。」

先生は教壇の段差に、足を引っ掛け、盛大に転んだみただった。まだチヨークの粉がついていることに気づかず、払いおわった思っている先生が授業を始める。

ちよつと抜けているところがあつても、その授業は、今までの授業なんか歯が立たないくらい、ものすごく、ものすごく、分かりやすかった。

私が興味を出す理由は、それで十分だった。

「あれ、皆、眠たそうだなあ」

先生が教室を見渡す。

ふいに目が合う。しかし、すぐに視線は別のところへいく。

あまり、じっと目を見て話さないのは、彼の改善点かもしれない。笑ってるときはそんなことないのに。

照れるのかな、なんて、自意識過剰か。

「今年は暖かいよな、そういえば前に、僕の友達が……」
また先生が脱線した話をする。
これはもう、恒例の儀式になっているかも。

先生が話したすと、いつのまにか皆、話に耳をかたむけている。
多分、それが面白いのを知っているから。
窓から爽やかな空気が入りこんでくる。

「で、先生は何してたんですか、その時」
生徒が質問をして、話がどんどん膨らむ。
私はこの時間が大好きだ。

「俺も連れて行かれてさあ」

そして、ふと気付く。

あ、俺になってる。

そういえばこの先生は、大抵の一人称は“僕”なのに、こういう時は自然に“俺”になる。

多分、“僕”が仕事用で、“俺”が素なのだろう。

“俺”の先生は、本当に楽しそうに喋る。

教師の表情に、子供っぽい表情がたまにまじる。

ふふ、

私の顔には自然と笑みがこぼれていた。

先生もそれに気づいて笑いかけてくれる。

それは、積極的でない私にとって、至福の瞬間だったりする。

準備係

帰りのSHRで、担任から、二日後行われる体育祭についての知らせがあった。

なんでも、準備係を各クラスから二人ずつ出すのだとか。

「誰かやりたい人いませんか？」

立候補者がいるかなんて、周りを伺わなくても、沈黙で分かる。皆、そのうち誰かが挙手する、と人任せなのだ。

「・・・誰もいないのですか？」

「・・・」

「・・・」

教室は静まりかえっている。

ああもう！仕方ないなあ！

「私、やります。」

あまり発言しなくせに、沈黙に耐えられなくなり立候補した私は、これから忙しく動くことになるのだらうな。

若干俯いて次の立候補を待つ。

「じゃあ、俺やりますよ。」

次の沈黙を打破したのは、佐々木一也。

クラスでは、そこそこ目立っているタイプといえる。

「佐々木君優しい〜！」

「あゝ、立候補すればよかったかも。」

「かつこいいよ〜！佐々木くんっ！」

一部の女子の黄色い声。

それを聞き流しながら、横目で佐々木君を見る。

ばちっ

「・・・っ！」

「あ」

視線が重なった。

「よろしくな。」

そう言い、彼はにっこり微笑んだ。

「え、あ、よろしくね。」

予想外の行動に多少驚いたが、軽くかえして視線を戻す。

「じゃあ、その二人は放課後さっそく仕事があるので、体操服を着てグラウンドへ行くように。」

担任がそう締めくくると、チャイムがなった。

紺色の体操服を着て、重い足取りでグラウンドへ向かう。

もうほとんどの生徒が集まっているのだろう、近づくにつれ、ざわざわとした声が耳に障る。

話の花を咲かしている生徒達のなか、私はぼつんとたたずんでいた。友達がいないわけではないけど、ずっと群れているのが好きではない私は、委員会等の時はほぼこの状態だ。

寂しくはないが、同情されると恥ずかしくなる。

「はい、皆こっち向いてください」

その声に、私の胸が跳ね上がるのが分かった。

振り返ると、案の定、田端先生だった。

「わ・・・体操服・・・」

つい口に出してしまうほど、先生の体操服姿は、
・・・
格好いい。

というか、田端先生が担当なんだ。

立候補した自分を褒めてやりたい。勇氣出してよかった！

「お、嬉しそうですね。宮城さん」

「！」

そんなに表情に出ているだろうか。かあっと熱くなる。

先生に呼ばれたのは、久しぶりだった。

「そんな宮城さんには、これを運んでもらおうかな。」

先生が指さしたのは、CDプレイヤー等、体育祭中の放送に使用するものだ。

しかし、見るからに重そうなものもいくつがある。

「げ………」

「僕も手伝うから。大丈夫ですよ」

そう言い先生は、くしゃくしゃと私の頭を撫でる。

初めてのことに、私の思考回路はしばし停止。

「………、宮城さん？」

ああ、先生の頭にハテナマークが見える。

心配そうに見つめられて、照れてしまう。

「あの、俺も手伝います！」

突然、佐々木君が入ってくる。

はっとして、やっと私は元に戻ることができた。

「重そうだし、重いから人数は多い方がいいですよね。」

本当にいい奴だな、佐々木君にはいつも感心させられてしまう。

田端先生も感心したのだろう、うんうんと頷いている。

「じゃあ三人でさっさと運んでしまおう。」

もう大丈夫かと、先生はさりげなく私を見る。

「はいっ」

大変だ、幸せすぎてにやけそう。

「よ、いしよっ」と

抱えた機械が思ったより重かったため、よろよとした足取りになる。

こんなに重いとは……。これは結構重労働だなあ。
なんてことを考えていたら、

「ほら、宮城はこれ持てつて。それは俺が目をつけたの」と、佐々木君がぱつと交換し、持って行ってしまった。

「無理しないで、持てるやつ持てばいいからな。」
横から田端先生が顔をだす。

「重かったら先生に任せなさいっ」
そう言いながら、一番大きい機械を運ぶ先生に惚れ直してしまう。

「あっ、コード忘れた！」
「せ……。先生、それさつきも……。」
走って戻っていく姿に、きゅうんと胸が苦しくなった。

このあと、重い物は僕と佐々木が運ぶ、という先生の提案のおかげで、私は楽に作業を進められた。

今までより親しくなれた気がして、帰り道、私は自然とスキップをしていた。

そして、オレンジに染まる空を、うつとりしながら仰ぐのだった。

準備係？

体育祭前日。

午後からは、体育祭準備があるので、準備係以外は昼前に下校しなければならぬ。

私のクラスでも、自分と佐々木君以外は下校である。

「じゃ、遙、また明日ね！」

荷物をまとめ終わった、友達の綾瀬さんが手を振る。

「あ、バイバイ」

綾瀬さんが教室を出る時、ふわりとした茶髪から、女の子の香りが出た。

なんだっけ…、新発売した香水をつけているとか。

顔立ちの整った彼女は、同級生の男子の目をひきつける。

現に、廊下を歩いただけで、もう何人にも熱い視線を送られている。

「そだ」

何かを思い出したように、こっちに帰ってくる彼女。

「準備、佐々木と一緒にだったよね。」

「え、そうだけど……。」

声のトーンが、急に低くなった気がした。

「あいつにあんま近寄らない方がいいよ？」

「え？」

今のところ私には、佐々木君がそんな事を言われる理由が分からない。

「な…なんで？」

啞然として聞くと、綾瀬さんはため息をしてからこう言った。

「分かんないかなあ、遙が近付ける相手じゃないんだって。」

「……ん？」

なんたる、この言い方。

まるで、私の身分が低いみたいに聞こえるのは、勘違いだろうか。

「佐々木君は、自分がいたから準備係になったとか思ってない？ 遙」

「め…滅相もない！」

おもいきり頭を振り、否定する。

そんなこと考えるわけじゃないか。私は田端先生しか……。

「そっか。」

綾瀬さんはいつもの笑顔に戻っていた。

「変なこと言っでごめんね、ただ、佐々木は優しいから遙の手伝いしてるだけだつて伝えたくて。」

「そか。大丈夫、分かってるよ。」

「うん、昨日一緒に機械運んでるの見てさ。それで気になって……」

「……」

「ん……？」

突然話がきれたと思ったら、綾瀬さんの視点が私の後ろに集中している。

「……？」

くるとその視線の先に目をやる。

「お」

「えっ……」

私の背後には、なぜか佐々木君がいた。

近づくなと言われた手前、とても気まずいのである。というかなぜ背後に？

「あ、えと、昼飯、宮城さんと一緒に食おうと思って。」

よく分からない方向を見ながら彼はそう言った。

予想外の言葉にぎょっとしてしまう。

「じゃあ私もお昼にしようかなあ〜」

綾瀬さんが椅子を持ってきて、佐々木君に座るよう催促する。

そして、その隣に彼女、向かい合わせに私が座った。

「お前、係ないのに昼飯持ってたのかよ。」

「持ってない、佐々木のちよつと貰う！」

二人の肩がふれる。

「あああ！俺の焼きそばパンが！」

こういう時、綾瀬さんの積極性を思い知らせれる。

最近の言葉でいう肉食系だな、うん。

もちろん私は、話の中には入れなかった。

こうして、つまらない昼食は終わった。

「じゃあね、佐々木、遥」

「…バイバイ」

「またな」

ふう…

彼女が帰ったあと、無意識に溜め息が出てきた。

彼女の匂いって、こんなにきつかったっけ。

なぜか息苦しい。

さっさとグラウンドへ行つて、田端先生に会いたい。

体操服に着替え、佐々木君とグラウンドへ行つた。

私は一人でもよかつたのだが、佐々木君が話しかけてきたのだ。

グラウンドでは、もう作業が進められていた。

「遅いぞ！」

田端先生が駆けてきた。

「あわわ、すみません」

慌てて謝る。

どうやら昼食に時間がかかったようだった。

田端先生に怒られるなんて最悪…。

「まあいいです、それより宮城さんは、体育祭で放送係をしてくれます!」

「え、はい。」

「急に放送係の一人が休むとか言い出してさ」

まったく最近の子は弱くて困るよ、なんて言いながら先生は、放送係の待機場所に案内してくれた。

グラウンドにたてられたテントという簡単な場所だった。

風で、屋根の布がばたばた音を立てる。

「ここで放送します。」

「はい」

「そして、今からコードを繋いでもらいます。」

「了解です。」

隣で説明してくれている先生に、緊張してしまう。

普段こんなに近づかないんだから、当然でしょ!

自分と自分で会話をしながらも、作業を開始する。

「それは難しいから、僕がやりますよ。」

よく分からないコードを、ぐねぐねしていたら、先生が手伝ってくれた。

30分後。

昨日、だいたいの作業をしていたし、元々の仕事が少なかったため、他の皆より早く終わった。

「ふうーっ」

テントの中に置かれたパイプ椅子に座り、日に照らされたグラウンドを眺めながら。

穏やかな風の中、うとうととしてしまう。

「っー」

唐突に、頬に冷たいものを感じた。

「ななななっなに!？」

勢いよく顔を上げ、辺りをきよるきよる見回す。

すると、背の高い男性が声を出して笑っているのが、目に入った。

「せ…せんせ…」

「っは…、お前驚きすぎだろっ!…っく、ははは」

「…先生は笑いすぎですっ!」

顔がかあっとなったのがわかった。

顔面からどんどん熱が上がってくる。

「ほら、あげる」

やっと笑いがおさまったのか、先生はペットボトルを手渡してくれた。

「ありがとうございます、です」

ひんやり冷たい。買ってきてくれたのだろうか。

「ご褒美。…昨日からよく頑張ってると思う。」

そう言っって頭を優しく撫でられる。

耳まで赤くなってるのが、ばれないだろうか。

俯いていたら、先生がまた笑いだした。抑えようと努力はしている
とみえるが。

「…つまさか、あんなに驚いてくれるとはなっ!先生は嬉しいぞ、
っくく」

「……………」

「む、なんだよ、笑いすぎたか?黙り込むなよ、寂しいじゃんか。」
肩をつついてくる先生に、吹き出してしまった。

「え、え、どうしたっ!？」

「ふふっ…、先生で、素はかわいいんですね?」

「そんなことあるわけじゃないか、先生はいつも素ですよ!裏
表のない、教師の鏡です。」

急に教師口調になる先生。

「時々、僕が俺になってますよ。」

「えっ！嘘！」

このことは、今まで気づいてなかったようだ。

「猫被ってましたか。」

「んなっ、俺はいつでも俺なの！」

「…俺、ですか。」

「あっ」

こんなに慌てる先生は初めて見た。

そんなに隠すことじゃないと思うけど…。

こんなにあたふたするとは思わなかったし、ここまでにしてやろうかな。

「私は、俺、の先生もいいと思いますよ？」

「ん」

「今日は素の先生が見れて嬉しかったです。」

「……宮城……」

にっこり微笑み、私がお茶を飲み干す。

「また明日、です。」

「あ、また明日。」

そして私は、先生のいるテントを離れた。

もう少し話したかった。

でも、緊張しすぎて、ショートしてしまいそう。

「…嬉しかった、か」

教室に戻る間、さっきの自分の言葉が頭の中でリピートされていた。

私はなんてことを言ってしまったんだ！

素が見れて嬉しい？、もし気持ちがバれてしまっていたら、どうし

よう！

私のバカバカバカ!!

「でも、話せてよかった、かな。」

ガラガラと、ドアが開かれる音がした。

誰か入ってきたようだ。

「あ、佐々木君」

「はあ…、あ、よう!」

なんだか疲れた顔をしている。

「…どうしたの?」

そういえば、グラウンドに着いてから見てないな、と今頃思い出す。

「女子たちに引っ張られてさあ、質問攻め。」

「あー。」

どうやら、女子たちに囲まれてたらしい。

彼は彼で大変そうだ。

「俺のことなんて知って、なにがいいんだか。」

うんざり、という顔をしている。それもそうだ、誰でも囲まれて次

から次へと、質問されれば疲れる。

「佐々木君の都合も気にしないとだめだね、本当に好きならさ。」

「……、そだな。」

佐々木君は微笑み、私の前まで近づいてきた。

「宮城さんは優しいな、そんなの初めて言われた。」

「そ…かな?」

「うん。周りの女子らって皆、自分の気持ちばっか押し付けてくるからさ。」

ありがとう、そう言って佐々木君は教室を出ていった。

体育祭

「只今から、空見高校体育祭を開催します！」

開会式、私は急遽放送係になったため前にいた。

全校生徒が集まったグラウンド、それを前から見るなんて初めてだ。田端先生の隣で、放送係の一人の言葉により、高校で第三回目の体育祭は始まった。

屋根の布を通り抜けた光が、先生の顔に当たっている。

「高校の体育祭も、中学校と変わらないな。」

先生はそう言っ、私の隣に座った。

「ですね、まあ同じ学校ですし。」

「宮城は競技、何出るんだ？」

頼杖について聞いてくる。開会式の最中、私語は慎まなくていいのか。

本当に先生なのか、なんて他の先生なら呆れてしまうかもしれない。しかし、仕事とか勉強以外で話しかけられるなんて。猛スピードで天に飛んでいってしまいうさそうだ。

「えと、借り物競走、リレーで、後は全員参加のやつです。」

「へえ、いいなあ。」

体育祭のプログラムを見る先生。

借り物競走の順番を確かめているようだった。

「?.....そうですかね」

「うん、俺はそんなに参加できないからさ。何気に体育祭、楽しみにしてたんだけどな。」

先生は、頬を膨らませてそう言う。

「俺も生徒だったら良かったのに！」

「……………」

先程から、先生の言葉にいつもとは違うものを感じていた。とはいえ、この違いは初めてではないものだ。

「……………てか、“僕”はもういいんですか？」

「え、ああ。もうバレてるし、お前だったらいいかなど、思いまして。」

「そ、そうでありますか……………」

いきなりそんなこと言われるなんてなあ……………」

恥ずかしくなつて、プログラムをのぞき込み、気にしていないふりをした。

それを背後に隠し、いたずらっぽく笑う先生。

「まあ先生の僕がいいなら、僕になつてあげてもいいですが？」

近づけられた先生の顔のせいで、急に熱くなる。

「なつ、これでいいですっ！」

「よしよし、照れるな照れるな。」

満足そうな顔を見ると、先生は放送係に仕事の指示をした。

その時には、すっかり教師モードになっていた。

借り物競走の順がくるまで、パイプ椅子に腰掛ける。

時々、音楽を流してくれなど頼まれ、そこそこ忙しかった。

そして、やっと落ち着いてきた頃。

「み、や、ぎ、さんっ」

そんな声と共に、後ろから誰かの手が肩にのびてきた。

「わっ!?!」

また先生!?

そう思った私は、わざと怒ったふりをして振り向いてみせた。

「もう!せんせ……………」

しかし、後ろにいたのは先生ではなく、おろおろした佐々木君だったのだ。

「え、なに！？悪かった、そんな嫌だったか…？」
怒ったと誤解されたらしい。

「…あ、ううん。そんなことないよ。」

「ほ、本当？」

「うん」

それを聞いた彼は、安堵のため息をついた。

「はあー、よかった。宮城さんに嫌われたら生きていけなくなるとこだったよ。」

「ぶっ、大袈裟。」

どうやら佐々木君は、私と話しにここまで来たらしい。競技が終わり、やっと休憩できるのだとか。

「宮城さんは、何にでる予定？」

「もうすぐ借り物競争にでるかな。」

「あ、今年の借り物は今までと違うから楽しみだな。」

「え、どう違うの？」

今までと違う借り物とか初耳なのですが。

きよとんとしている私に、彼が何か言おうとした時

「只今から、借り物競争です。出場者は出てきてください。」
という放送が流れた。

「あ、私行かないと！」

バイバイ、そう手を振って私は出場門へ向かった。

私の順番は3番目、回ってくるまで並んで待っていた。

ちらつと田端先生のいる場所を見ると、先生と目が合った、気がした。

そして、いよいよスタートラインに立つときがきた。

「宮城さん！頑張れ！」

そんな声が聞こえてきて、辺りを見回すと、佐々木君が観覧席から

こちらを見ていた。
彼に手を振って、気合いをいれる。

パン！

軽快な音とともに、私は走りだした。
箱に手を突っ込み、借り物カードを引き抜く。

「えっ！」

そこに書いてあったのは

『好きな先生にお姫様だっこ』

理解するのに数秒かかった。好きな先生……というと私には一人しかない。前年までは、『三つ編みの人』とか『友達』とかだったのに！

丁寧に行動まで指示されている。

運がいいのか、悪いのか。

他の人を見ても皆、嬉し恥ずかしな顔をしていた。
そのカードは『好きな人』、『異性』などとみた。

まったく！今年の体育祭実行委員は頭ピンク色なのかよ！

と、こんなことをしている時にも時間は進んでいる。覚悟を決めて
田端先生の所へ行くことにした。

先生も、自分が借り物だと気付いたようだ。

「お、俺か！？」

「先生、お姫様だっこしてください！」

ほぼ叫ぶような感じでそう言うと、先生の顔がぼかんとした。

「は………？」

「おっ、お姫様だっこしろって書いてあるんですっ！」

ほら！とカードを前に突き出す。

そこで、自分の失態に気づく。

「……好きな先生に……」

先生がカードを見つめている。

「あああ！」

顔が赤くなってしまう。

手を引っ込めようにも、体が固まって動かない。

「こ、これは、その！」

すると、ひよいと体が浮いた。

腰と足が、大きな手で支えられ、顔が先生の首筋に触れそうになった。

「わわわわわ！」

「こら、落ち着け！早くしないとビリだぞ！」

そう言っ、先生はゴールに向かって走り出した。

時々、息がかかり、心臓が異常な程の音を出していた。動きすぎて軽く痛いくらいだ。

「はあっ、ゴール！」

そう言っ、ゴールに着いた先生は、私を降ろしてくれた。

そして、テントに戻ろうと背中を向ける。

「ああの、先生、ありがとうございました。」

「…………おう。」

顔を見せずに、行ってしまう先生。

私も同じところに戻るのですが。

先生を追いかけて、隣を歩く。

「うわっ！」

「な、うわっ、何ですか！失礼です！」

そう言っ、先生を見る。

「あ…………！」

先生は耳まで顔を赤くしていた。

「み、見るな見るな！」

それを手で隠そうとする。

「…………、“好きな先生”ですか？」

「仕方ないだろ！そんなのあまり言われなからだからな！」

必死に顔を隠す先生を見てみると、笑いが込み上げてきた。しばらく、そうして私たちは歩いていった。

正直、避けられたらどうしようって心配だったところもあったから、安心した。

しかしきつと彼は、“好きな先生”という意味でとらえているだろう。

ちよっただけ残念に思った私なのであった。

そして、体育祭もあと半分となった。

体育祭？

午後12時半。

40分間の休憩がとられ、教師生徒共に昼御飯だ。

私は、テントから離れ、綾瀬さんを探す。

全校生徒が集まっているだけあって、見つけ出すのはなかなか難しい。

中学だったら、茶髪の彼女は発見しやすいのだが、高校生になり校則が緩くなつたため、髪を染めている女の子たちは多い。

むしろ、私みたいに黒髪の方が珍しい方もしれない。

そんな中私は、やっと綾瀬さんを見つけた。

しかし、その彼女は他の友達たちと弁当を広げていた。

昼の強い日差しのせいで、じわじわと汗が出てくる。

額に前髪が引っ付いて鬱陶しい。

「あ、あの」

いくら私でも、体育祭に一人で昼御飯という、悲しい状態は嫌だ。

ここは、混ぜてもらおうべきだと思った。

「私も一緒に食べていい？」

そう聞くと、綾瀬さんが独り言のように発言する。

周りの男子たちに気づかれないために小声なのだろう。

「佐々木に話しかけられるからって、調子のってんじゃねえよ。」

それに周りの女の子達が同意する。

あくまでひそひそと。

しかしすぐ隣にいる私にはしっかりと聞こえるように。

「だよね！地味なくせに佐々木に近づくなんて。」

「手、振ってたの見たあ？」

「結構、男好きだったりしてねえー」
調子に乗った時なんて一度もないのに。
全て自分に向けられているのだと、すぐわかった。
空気が重い。
こんな中に混ざれるなど、誰も思わないだろう。
ましてや、綾瀬さんという女子たちは、クラスでも私が苦手とする
部類の人たちだ。

「……………」

私はその場から離れ、誰もいないであろう校舎裏へ駆けていった。
泣くと負けたような気がするから、泣きたくない。
必死で気持ちを反らそうとする。
涙腺を緩ませないように、瞬きもしてみる。
なのに、手のひらにはしずくが落ちる。

「……う、……く」

ふと後ろから足音がした気がした。

「……………」

誰か来たのかと、後ろを振り向く。
そこには、見慣れた顔があった。

「……………」

「……………」

先生は、校舎裏にしゃがんでいる生徒がいたので、見に来たらしい。
「……………」これは、えと……………」
何か言い訳をしなければいけない、なのになかなか言葉が出てこ
ない。

狼狽していると、先生がしゃがんでいる私の手を持ち上げてきた。
それから引つ張られて立たされる。

「あのっ……………」

「……………」弁当食ったか？」

「え、まだですけど…」

「よし」

そう言うと先生は、テント下まで私の腕を引っ張って、椅子に座らせた。

そしてコンビニ弁当らしきものを広げる。

「腹が減っては戦はできぬ、だぞ！」

「……はあ。」

「ほら、お前も弁当食べ。じゃないと俺が食べられない。」

何がしたいのか、先生は私が弁当を広げて食べ始めるまで、自分の手をつけなかった。

「いただきます…」

「うん、いただきます！」

待ってましたとばかりに、弁当を口に放り込む先生。

あつというまに食べきってしまったようだ。

「そうだ、借り物競走の時、ありがとな。」

「ああ、いやいやそんな。」

少し照れくさくなってしまふ。

「俺、参加したかったから嬉しかった。」

「そうですか、よかった。」

でも、やっぱりさっきのことが頭から離れない。

「佐々木じゃなくて悪かったな、とか言ってるやろうと思ったんだけどな。」

「…な、なぜに佐々木君…」

女子たちの怒りの原因となった名に、どきつとしてしまふ。

「お前ら、よく話してるから。」

「む…、そんなことないですけど…」

「うん、好きな先生って字見て、言おうと思ってたのに吹っ飛んだ。」

「お…思い出させないで下さい！恥ずかしいっ」

嬉しそうに笑う先生を見ると、少し心が軽くなった気がしないでも

ない。

「……………」

「ん、どうした宮城。」

「聞かなくて良いんですか、さっき泣いてた…理由とか。」

「……………ああ……………」

「……………先生？」

一瞬、真剣な顔になる先生に緊張する。

そして次に先生の口から聞いたのは、意外な言葉だった。

「話さなくていい、思い出したらまた泣くだろ、どうせ。」

泣いた女の子の顔なんて見たくない、そうやって私の両頬をつまみ、

無理矢理笑顔を作らせた。

笑顔というのとは、ほど遠い気がするが。

「あ…あによ…」

困る変顔の私を見てか、先生は吹き出した。

「つく、…それに、理由なんて大体分かるしな？」

「ふえっ！」

そのあとは放送が入るまで、ずっと先生にかまってもらった。

いや、かまってあげていたのかもめない。

どうやら先生は、頬をいじるのがお気に入りになったようだ。

暗い気持ちは、話している内に飛んでいったようだ。

「只今から、リレーを開始します。出場者は出てきて下さい！」

私の最後の個人競技。準備運動をばっちりしてスタートラインに立つ。

これが終われば、もう後は座っているだけだ。

より気合いが入る。

渡されたバトンを受け取り、走り出す生徒たち。

もちろん私も。

後ろの人との距離を、少しずつだが広げながら走り、あと少しで次

にバトンを渡せる……。
手を前に伸ばしながら走る。

そのときだった。足に痛みが走った。

「いたっ…！」

何かが当たった。

当たり所が悪く、私は盛大にずっこけた。

グラウンドには結構、砂利があつたため、膝小僧が出血していた。ふいに足下を見ると、そこには石が転がっていた。

「い…し…？」

どうやら、どこからかこの石がぶつけられたらしい。

これほど大ぶりの石は、リレー直前にでも処理されるであろう。これは誰かに投げられたとしか考えられない。

そんなことより、とにかく今は走らないと！

不恰好な走り方だがなんとかバトンを渡せた。

戸惑いながらも、次の人が、バトンを手に走ってつないだ。

「はあ……よかった…」

周囲も事情が分かったのか、変な走り方だと誰も笑わなかった。出血しているので、やはり保健室へ行くべきだろうか。ふらつきながらトラックから離れる。

思ったよりも、足が痛がつているようだ。

「みや…！」

「宮城さん…！」

佐々木君が足を引きずっている私の元へ駆けてきてくれた。みんなの前では、あまり近づいて欲しくないのだけど……。それにしても、その前に別の誰かも私を呼んだような…。

気のせい……。かな、お化けじゃなければいいけど。

「って、それはないか。」

「え？」

「あ、なんでもない！」

きよとんとしながらも、肩をかしてくれる佐々木君。絶対今、女子達に睨まれているだろうな……。しかし、一人では歩けなさそうだったので、ご厚意に甘えることにした。

「大丈夫か？何か飛んできたように見えただけど？」
私を保健室のベッドに腰掛けさせ、足を見つめる。

「あはは、誰かが蹴ったのが当たったのかな？」
「ん、迷惑な奴がいるもんだな。」

佐々木君は眉間に皺をよせる。

さすがに女子がやったであろうとは言えないでしょ。

彼は、私を見て大丈夫だと安心したのか、穏やかな表情を浮かべる。

「俺、すごい心配だったんだからな！」

そう言った佐々木君に突然抱きしめられてしまった。

急接近に顔が熱くなってしまった私だが、

佐々木君はごく自然だから、多分あまり意識していないだろう。

軽く複雑な気分になっていると、また傷口がじんじんしてきた。

「ありがとう……。でもあの、保健の先生を呼んできてくれないかな……。」

「あつ！ごめん、すぐ呼んでくる！」

佐々木君は保健室を飛び出ていった。

「ふう……。」

保健の先生がくるまで、ゆっくり待つとするか。

ごろんとベッドに倒れた。動かすと痛いので片足は曲げたままだが。

ガラガラとドアの音がした。

「あれ、佐々木君、速かったね！」

起き上がって先を見ると、そこにいたのは、保健の先生を連れてきた佐々木君ではなく、どこか不機嫌な顔をした田端先生だった。

「……あ、りや、田端先生。」

「…、佐々木じゃなくて悪かったな」
近づいてくる。

「え、いや、保健の先生呼びに行ってもらってるから…。」
「知ってる。…：大丈夫か、足。」
「ちよつと痛いんですけどよ。うん」

先生は薬がある棚を探る。

そして、消毒液とガーゼを持って目の前まで来てくれた。

「え、え、え、え、え！」

「…：俺に頼ればいいものを。」

ぶつぶつ呟いて、消毒液のフタを開ける。

「いくぞ。」

「し、しみますか！しみますよね！待って、心の準備があ！」

「っはは、すすむから。安心しなさい」

そう笑った先生は、傷口を優しく消毒する。

「いたっ、あうう…。」

痛みがじわじわと伝わってくる。

「あ〜！う〜！」

「…：っふ、はい、遙ちゃん、終わりましたよ〜？」

先生は、痛がっていた私を子供扱いしてくる。

どこか嬉しそうなのは気のせい？

「もう！止めてください！気持ち悪いですよっ！」

「む、先生に向かつて気持ち悪いってなんだよ〜！」

また頬をつまんでくる。

それどころか、左右上下にグニユグニユされる。

「ひゃめてくらさ…！」

「はっはっは！参ったか！」

じゃれ合う私達。いや、一方的にじゃれてる？

「おらっ、おらおら〜。」

「みゅ〜っ！ひえんひえ〜！」

足をバタバタしていたら、引っかかってしまったようだ。

何にかつて？先生の足にだよ！

そうになると、起こることは一つしかなくて……。

「うおっ！」

「わー！」

ぼすつ、とベッドの上に倒れる二人。

必然的に押し倒される体制になっていて、か…顔が近い。

「……………」

「……………」

十五センチ以内に先生の顔が……！

大きく開かれた先生の目に吸い込まれそうだ。

いきなりのごとに何も言えなくなってしまうた。

「あ……つと、ごめん」

ぎこちなく起き上がる先生。

背けられた顔が、どんな表情をしているのか気になる。

でも私の体は、動けなくなっているのである。

「……………いえ。」

沈黙に困っていると、ようやく佐々木君が保健の先生を連れてきた。そして、出て行く時にいなかった顔に気付いたようだ。

「あれ、田端先生じゃないすか。」

「……………、手当はしときました。早いほうがいいと思ひまして。」

何事もなかったように、保健の先生にそう報告すると、田端先生は私の腕を持った。

「歩けるか？」

「あ、はい。」

「よし、行くぞ。」

引つ張られながら私は、保健の先生に礼を言った。

「あ、わざわざありがとうございます。」

「お、おいつ！俺もいくよ！」

佐々木君も後ろから追いかけてきた。

「後は俺が連れてきますよ、先生。」

「いや、僕がやりますから、先に行つてていいですよ。」

「…大丈夫ですって。先生忙しくないんですか？」

田端先生が何か言おうとしたが、それは他の先生の声で止められてしまった。

「いたいた、田端先生、いなくなつてもらつては困りますよ。」

「あ、大西先生。すみません。」

田端先生は、ちらつと私を見る。

「後は俺に任せてください。」

佐々木君が笑顔でそう言う。

「……、じゃあ頼んだ。」

ぼそつと呟いた先生は、仕事のために戻つていった。

「あ、田端先生！頑張つてくださいね！」

私は離れていく背中に、声をかけた。

それに振り返つて微笑み、先生は走つていった。

その後、体育祭は無事に終了した。

明日からはまた、日常に戻るのだった。

嫉妬

体育祭からもう一週間が経った。

あれだけ話せた田端先生とも、授業以外では会えず、話せていない状態だ。

「次のページ開いて図1を見てください。」

只今、生物の授業中。

いつもの癖で、告白を書いていた私は、急いで教科書をめくる。

手が動いていても、耳は自然と先生の声を受け入れている、生物では聞き逃しをしたことがない。

蛇足を話しながら、板書する先生。

窓から優しい光があたって、髪の毛の先が茶色っぽく見える。

「皆さんは、ゲテモノ料理って食べたことがありますかね？」

また脱線し始める先生。

自分の体験談を楽しそうに話す彼が可愛くて、つい、じっと見つめてしまう。

「…！」

目が合った…？

すぐに反らされたため、それは勘違いなのか、そうでないのか分からない。

あれだけ話した時があったとしても、“先生”は目が合っても反らすのだろうか。

なんとなく寂しいなあ。

質問でもしに行って話そうか、と考えたこともある。

というか授業後はいつも考えるかもしれない。

しかし私は、生物がものすごく得意なのだ。

もちろん、田端先生の教科だからだが。
つまりは、質問するところがないのです。
あっても、自分で解決してしまうことがほとんど。

でも、これではまた距離が遠くなることは確かだ。
これじゃいけない。

せめて仲がいいのは保ちたいから、恥ずかしくても、無理矢理に質問をしよう、かな。

そう考えていると、斜め後ろくらいから、肩をつつかれた。

「…？、ああ佐々木君、どうしたの？」

それは心配そうな顔をした佐々木君だった。

「なんか、ポーツとしてるけど…、大丈夫か？」

私はずいぶん考え込んでいたようだ。

そんなことで心配されるなんて。

自称生物優等生の名に傷がついたな。

「大丈夫、ちゃんと聞いてるよ。」

そう答え、話し続ける先生に顔を向ける。

話がいまだに脱線している。

それなのに、授業進度は早いから驚く。

「あ、もうこんな時間かー。」

腕時計を見て話を止めた先生に、続きを話せと促す生徒。

でも、すぐにチャイムが鳴ってしまった。

「あー…」

「起立！、礼！」

級長の言葉で、授業は終了してしまった。

教室がガヤガヤし始め、教壇で教科書などをまとめる先生に質問しに行こうと席をたつ。

「せんせ……」

「宮城さん！」

突然腕を掴まれて、それは中断された。掴んだのは女子生徒、体育祭の昼間の、あのグループだった。もちろん綾瀬さんも。変な汗が額に垂れる。

「あ、なにな……。」「

「ちょっと話したいことがあってえー。こっち来てくれない？」
何人かの女子達が廊下の方から手招きをしている。

「えっ……と……」

拒否権はないのだろう。

でも、行きたくないと脳がいつている。

なんとか時間を稼げるようにか、返事がなかなか出来ない。

「ねえ、早く！」

乱暴に引つ張られる。

心臓が、どくどくどく、と勢いを増して動き出す。

「ちょ、やめ……っ！」「

「おーい、宮城さん！」

「えっ……」

前から田端先生が呼んでいた。

「あ、ごめん。呼ばれたから行けないや……。」「

腕を引つ張った子は、面白くなさそうに、手を離す。

人の目も気にしたのだろう。

「……っ、じゃあまた」

救われた気持ちで、田端先生のもとへ行く。

「何ですか？」

「ちょっと、次のクラスで使う道具を運ぶの手伝って欲しい。」「
どうやら実験でもするようだ。」

先生に授業の準備で頼まれたのは初めてで、素直に嬉しい。それに、今は席に戻りたくないなので、むしろやらせてください、と言ってもいい。

「はい！」

先生の後について、準備室まで来た。

普段教師しか立ち入れないここに入るのは初めてだ。

「じゃあこれとこれ、よろしく。」

「は…はいつ。」

棚の奥にあった段ボール箱を引つ張り出す。

「よ、いしょつと」

「お、大丈夫か？」

「はい、おっけーです。」

ドアを開けて待つている先生のところまで進む。

「じゃあこっち置いて。」

そう言われ、段ボール箱を生物室の台の上へ移動させた。

どうやら、これで終わりのようだ。

「まだ時間あるな。」

「あ…、そうですね」

これから教室に戻ったら、また綾瀬さん達が来るかもしれない。でも用もなく生物室にいるのもなんとなく気がひける。

「ギリギリまで俺が相手してやるつか？」

「えっ！」

「今戻ったら困るんじゃないかと思っただけど。」

そう言っただけで先生は、椅子に座り、私も座らせる。

何か困るのは、気づいてくれていたようだ。

「…じゃあお言葉に甘えさせてもらいます。」

「うん。」

何か話すことはないかと考えてみる。

「あ、そういえば久しぶりですね、話すの。」

「そうだな、なかなかタイミング無かったし。」

先生は頷く。

「あれつきりなのかと思って悲しかったんですよ。」

ぼろっと出てしまった言葉にはつとめるが、先生の反応は普通だった。

「…そんな心配してたのかよ。お前は生徒、いつかは絶対話すだろ。」

「…あ、ですよね。」

別に照れるだろうなんて思っていなかった、いや、少し思っていた。だから、その反応には軽く傷ついた。

お前は生徒、その言葉がぐるぐる回って、心をずきずきさせた。

「生徒、か……」

「ん？」

「あ、いえ。…じゃあそろそろ時間だし、戻ります。」

生物室から出ようとして、立ち上がった。

そして、ドアを開けて廊下に出た時。

「何かあつたら、先生を頼るんだぞ！」

田端先生がその声をかけてくれた。

頭から、ぱあつとなるのが、面白いほど分かった。

前にも頼れって言われたっけ…。

ともかく、今日の収穫、先生と話した。

放課後。

特に用事がないので、帰る準備をする。

と、誰か近づいてきた。

「宮城さん宮城さん」

佐々木君だ。

「この後、暇か？」

「んー、なんで？」

掃除代わって！とかだったら、用事があると言って断ってやるっ。

「えーと…、あつ。」

「？」

「生物の問題で分からないところあってさ…。」
なるほど、教えてくれということか。

それくらいなら、そう返事をしようとした時。

「あー、ごめん佐々木。宮城さん借りるよ？」

「……！」

綾瀬さんたち、だ。

放課後なら逃げられないだろうと狙われたのかも。

「えっ…、じゃあ俺も行っていい？」

「だーめ、佐々木はここで待ってて。」

顔をのぞきこむように、上目遣いで綾瀬さんはそう言う。

「なんで綾瀬が言うんだよ、俺は宮城さんと」

「……、宮城さんって性格悪いんだよ。」

「はあ…？」

悪びれる様子もなく、彼女はデタラメを述べる。

まるで本当のことみたいに。

佐々木君は、ただしかめっ面をしている。

「佐々木には宮城さんより、私達みたいな優しい性格の子が似合う
と思う！」

さりげなく佐々木君の袖をつまむ。

あ、これモテテクとかいうやつじゃない！？、テレビでみた！

そんな状況じゃないけど、感心してしまうよ。

「じゃ佐々木、待っててね。一緒に帰りたいなあ…、ね？」

にこりと微笑んだ彼女たちに、私は連行？された。

連れてこられたのは校舎裏。

そういえば体育祭の日に田端先生に見つかった時もここだったなあ。

「…わかってるよね、なに話すか。」
あの日は違い、前に立っていたのは冷めた目で見つめる彼女たち
だった。

嫉妬？

「別に、佐々木に気があるとかじゃなく……て……」

「あるじゃん、話しかけられて喜んでんじゃん！」

「別に普通だよ……」

じりじりせめられ、壁に頭がくっついて冷たい。

私は女の子達で囲まれてしまった。

どうしても嫌なのだろう、次々と質問が飛んでくる。

「じゃあ話しかけられても無視してよ。」

「それは、佐々木君に悪いっていうか……。」

「……佐々木君に悪い？」

綾瀬さんが皺をよせる。

「自惚れんなよ、地味子のくせに！」突然に頭をつかまれて、校舎の壁に叩きつけられた。

鈍い音と共に、痛みが伝わってきた。

「……っ！」

「あはははは！ごめん、痛かったかなー？」

「友ちゃんやりすぎい、……っぶ」掴まれた髪はくしゃくしゃになっていた。

雲が忍び寄ってきて、空が黒に覆われる。

「調子に乗ったこと、後悔させてあげる。」

私に鋭い視線を向ける女の子達。

何度も何度も、頭を叩きつけられる。

必死に抵抗しようとするが、手足は周りにおさえられていた。

「……っや、やめ……て！」

振り回されて、頭がぐらぐらしてきた。

「……っや、やめて！だつてさーきゃははー！」

「自業自得だろ、気持ち悪い！」
抵抗は彼女達に快感を与えるだけだった。

「お前ら!!!」
「…きゃあつ!?!」

誰かが彼女達を引き離したらしい。
頭が自由になって、私は崩れ落ちた、ような気がする。

意識が遠退いていく…、名前を呼ばれているんだけど……

「…ぎ!、み…ぎ!」「…ん…ん」
「宮城!」
「せ…んせ?」

目を開けると、眼前に田端先生の顔があった。

「大丈夫か!」
「……大丈夫です、けど」
見慣れた所だと思ったら、自分の部屋。
私はベッドに横たわっていた。

「…先生が運んでくれたんですか」
「ああ、あと佐々木も。保護者に電話してくれてるぞ。」
私の親たちは共働きで、土日以外は、夕方まで帰ってこないのだった。

「ありがとうございます。先生。」

「いいって、先生の役目だろ。佐々木にも礼言えよ。」

「……はい。」

「宮城さん！」

わたわた佐々木君が入り込んできた。

「よかった、もう起きないかと思った！」

「か…勝手に殺さないで」

「ご、ごめん！」

相当心配してくれたのだろう、少し涙目だった。

「……。良かったな宮城」

「え？」

「……なにが？」

ドンドンドンドン！

突然、猛スピードで階段を駆けあがる音がした。

「な…なんだ…？」

私を含め三人は部屋にいるのに…だ…誰！？

ドアの前で止まった足音に緊張が高まる。

ガチャガチャガチャ！

バタン！

「はるかー！！！」

「わ、わあああー！？」

背の高い、誰かが、ベッド上の私に飛び付いてきた。

速すぎて顔を確認しそこなった。

「ただただ誰ですか！？」

「兄の顔も忘れてしまったのか！そんなに重傷だったのか！」

「え、お兄ちゃん？」

「病院でも兄ちゃんが看てやるから安心しなさい」
そう言つて、抱きつきつつも撫でる。

これは確実にお兄ちゃんだ。

「もう、大丈夫だから」

「遙！…よかつた」

無理やり引き剥がすと少し寂しそうな顔をした。

文系の大学三年生。

昔からこの人は、いわゆるシスコンなのだ。

よく言えば妹思いというか……。

小さい頃からよく遊んでくれた。

「ぬお！…どちら様ですか？」

先生と佐々木君に気づいて、顔を赤くしている。

「田端先生と、佐々木君だよ。」

二人は苦笑いしていた。

まあ、いきなり飛び込んできたんだから無理ないか…。

「…初めまして、兄弟仲いいんですね。」

「ああ、一方的ですけどね」

お粥作つてきてやるよ、と兄は降りていった。

風邪ではないのだけれど……。

窓から見ると日はもう沈んでいた。

「じゃ、俺そろそろ帰ります。宮城さんお大事に」

時計を見て、佐々木君は立ち上がった。

「あ、ばいばい。」

「また明日な。」

部屋には先生と私しかいなくなっていました。

「……………」

なんだか先生はさつきから静かだし、何も言わず時間が過ぎていくと、先生が口を開いた。

「俺を一番に頼れとか言っただけど……」

「……………？、はい」

「最初にお前を助けたのは、佐々木、だった。」

別に気にしないけど、先生には重要みたいだった。

「……………ごめん。一番に助けたかったのに」

「そんな、良いですよ。こうしていてくれるだけで嬉しいです……」

「

俯いていた先生が、顔をあげた。

「……………」

頭のズキズキと、胸のドキドキが混じって、何がなんだか分からなくなる。

「あ……の？」

見つめられる恥ずかしさに耐えられなくなったため、目を反らした。その時、先生の腕が私を包み込んだ。

「……………えっ!？」

数秒なにが起こったのか理解ができない。

これは、恥ずかしいどころじゃ、ない!

「田端……先生……っ!？」

「ごめん、今だけ」

背中にある先生の手に、力がこめられる。

「……………っわ」

「あと少し、こうさせて、ほしい。」

声がいっつもより大人な感じで、緊張する。まあ大人だけど。

「……………はい……」

もう大人しくするしかなかった。

シャツから先生の匂いがした。柔軟剤みたいな、石鹸みみたいな香りだ。

「心配したんだから、な」

「…はい…」

「……………」

とき卵とネギ入りのお粥を手にしたまま、兄はドアの前に立っていた。

(どうして、遥と教師が…)

「……………」

少しして、先生は私から体を離す。

「生徒に何やってんだか。駄目だな、俺」
視線を落として言われた。

否定しようとしたけど、先生はすっと帰ってしまった。

「あーあ…」

まだ、手に大きい背中感覚が残っている。

もうちょっと先生の体温を感じていたかった…かも

ドアにもたれ掛かる。

少し開いた隙間に、お椀のようなものが見えた。

「あ、お粥…」

扉のそばの床に置いてあった。

少し湯気が出ている、まだ温かいらしいぞ。

冷めないようにとかいう配慮がないなんて、兄らしくないと思いつつ冷めかけのそれを口に運ぶのだった。

テスト

あの日から佐々木君は心配だからといって家まで送ってくれるようになった。

先生達が何か言ったのか、あまり女子達は絡んでこなくなった。

無駄に長い外階段。

帰りは楽だが、朝登る時は足にかなりくる。

しかし、白く長い外観が結構人気で、学校のシンボリック的存在になっていた。

「もうすぐテスト期間だな。」

「うん。」

長い段を二人で降りていく。

「佐々木！ちょっと頼まれてくれないか」

「おわ、田端先生！」

ひよこつと後ろから顔を出してきた田端先生。

隣の私と目が合って、佐々木君と帰っていることを悟ったようだ。

「……あ、やつばいいわ。自分でやる。」

そう言った先生は、頭を掻きながら背中を向けて戻っていく。

頑張れよ、佐々木！

そう耳打ちしていたのが聞こえた。

軽くシヨックなのである。

「勘違いされてるんだ…。」

思わず口に出してしまった。

「え？なに？」

佐々木君が顔を近づけてくる。

……佐々木君には悪いけど、どうにかして誤解を解きたい。

もし本当に、先生が、私と佐々木君の仲を勘違いしてるのなら。

何か口実を探す。

「えっと、うーんと…」

「???:宮城さん?」

階段の途中で止まっていて目立っているのか、ちらちらと視線が…。
佐々木君は私がお話の待つてゐる、多分。

「あ」

そだ、もうすぐテスト期間だ

質問しに行くことにしちゃおう。

「ごめ、田端先生に質問したいことあったんだった。」

「じゃあ、俺もいつしよに…」

「ってことで、先帰ってて!たくさんあるから!」

ごめんね、佐々木君!

内心そう思いながら、階段を駆け上がり、職員室へ向かった。

職員室前。

中を見渡す限り、田端先生の姿はない。

たまたま通りかかった、他学年の先生(多分)に聞いてみる。

「田端先生いらっしやいますか?」

その先生は、髭の生えた顎に手を当てた。

「…生物室、でしょうかね? さっき雑巾持っていましたけど。」

「あ、ありがとうございます!」

早足で隣の校舎の一階、生物室へ向かった。

明かりがついている。

「失礼します…、田端先生いますか?」

引き戸を引いて、中に入ると、しゃがんだ田端先生がいた。

こっちを向いて、首を傾げた。

「あれ、どした、佐々木は？」

「あ…、先に帰ってもらいました。」
来たはいいけど、どうしよう。」

佐々木君は友達です、なんて突然言うのも駄目だしな。
脈絡がなさすぎる。

質問も実は無いし。困ったな

「……、俺に用か？」

作業に戻った先生は、床を拭いているようだった。
何をしているのか気になって、近づいてみる。

「…薬品？こぼしたんですか？」

「……、……秘密だぞ」

別に危険なものではないようだから、手伝うことにした。

「ありがとな、宮城」

二人分の雑巾を絞りながら、礼を言われた。

でも、なんか、元気が無いような。気のせい？

「…で、俺に用あった？」

「あゝ、えっと…」

先生を訪ねてきたことを、すっかり忘れていた。

どうやって切り出せばいいのだろうか、もしかしたら勘違いかもだし。

そうだったら、恥ずかしいし……。

そうこう考えていて、沈黙が続く。

「何も無いなら、佐々木のとこ行ってやったら？まだ間に合うかもよ」

勘違い、してるってことで……いいよね？

「私…、佐々木君、好きじゃないですよ？」

ちよつと変だつたかもと後悔する。

間に合うかも、から、好きじゃない、って返事はおかしかった!?
先生はなんて言うのか待ってみる。

「……」

「……」

「……佐々木かわいそ」

なぜか、ぷつと吹き出す先生。

「いや、あの、恋愛感情の好きじゃないってことですよ!」
かわいそ、と言われて、一応、言葉を付け足しておく。

「それに、私が好きなのは、田端先生ですから」

笑っている先生を見てみると、ついつい、ぼろつと出てしまった。
だから一瞬、自分でも何を言ったか分からなかった。

先生も固まっている。

……しばらくして、沈黙を破つたのは先生だった。

「はは、よく言われる。憧れのか、好きな先生だつてな。」

「へ?」

「さあ、もう子供は帰りなさい、ほらほら」

そう言った先生は、準備室へ入っていった。

違う好きと解釈されたようだ。

よかつたのかよくなかつたのか、複雑な気持ちで生物室を出たのだ
つた。

微妙とはいえ、先生と話せた今日は幸せな日だ。

家へ帰って、居間にいるときも、にやけていたらしい。

「良いことでもあつたのか?」

そう兄が聞いてきた。

なんとなく恥ずかしくて、かあつと顔が熱くなった。

「……、まさか、恋愛絡みなのか……?」

兄の表情が暗くなる。

こういうことに関しての彼の質問は、いつも控えめだ。

「に、兄ちゃんには関係ないもん！」

小さい頃から近くにいる兄に、恋愛のことを言うのは恥ずかしい。

こうやっていつも、答えてあげない。

「そっか…、兄ちゃん寂しいな」

立ち上がり、居間から出て行こうとした兄が小さく言った。

「遙が選んだ奴なら…、歓迎してやるからな？」

その声は小さくて分かりづらかったが、どこか湿っぽかったような。

テスト？

テストまであと約2週間。

「遙ちゃん、ちょっと教えてくんない？」

休み時間中に読書をしていたら、隣に女の子が来た。

古川 凜、同じクラスの子だ。

あまり派手じゃない、けど地味でもない子だったような。

彼女の手には、開けた生物のテキストがあった。

まさか、今までの猛烈な努力（生物のみ）が、テスト以外に活躍する日がくるなんて！

ほとんど一人の私には大歓迎なイベントだ。

「いいよ」

「やた、遙ちゃん生物得意だもんね？」

にこつと歯を見せて笑う。素直にかわいい。

それと、名前で呼ばれたのは中学校以来で、なかなか嬉しい。人懐っこいのもしれないな。

「えと、ここ覚えたらいいと思うよ？」

重要なところを指さしていく。

その間、古川さんは真剣に聞いてくれた。

「すごいね、すごく分かりやすい」

大体言い終わってから、古川さんはうんうんと満足気に頷いていた。

「なんか今回のテストは新たな自分が生まれそうな気さえしてきたよ！」

彼女の場合、新たな自分は結構簡単に見つかるらしい。

見習いたいものだ。

「そだ！」

手をパンと叩き、古川さんはポケットを探る。

そして、そこから出されたのは、熊が散りばめられた？メモ帳。

「携帯、持ってる？メアド交換しよ？」

一枚、ちぎられたメモを渡される。

携帯か、そういうえば持っていたな。

高校生になった春に、お祝いにと母が買ってくれた。使う機会がなかったから、引き出しに入れっぱなしにしてある。

「もちろん、いいよ」

メモにメールアドレスを書き込んでいく。

自分の名前と誕生日だけという簡単なアドレスだ。

電話番号はさすがに思い出せなかったから、後で送るとしよう。

「もちろん、って嬉しいな。当たり前な感じで」

古川さんは、さっきからずっとニコニコだ。

こっちまでつられる。

早速、私のメアドを登録しているようだ。

メモと画面を交互に見ながら打ち込んでいる。

電子音が妙に嬉しい。

短い休み時間が終わるチャイムが鳴った。

生物の授業、いつも通り田端先生が入ってくる。

黒いスーツに、青、白、藍色のストライプのネクタイ。

先生は青が似合う。

「もうすぐテストなんで、今日は要点を復習しましょうか。」

授業を進めるのが早い先生は、テスト前になると振り返りをしてくる。

だから生物は平均点がいつも高い。

「ここはおさえといてほしいですねー」

教科書にマーカーで線を引く。

田端先生には、試験への『情熱』的なものが伺える。

今日は無駄話無しで授業が進んでいった。

終わった後、私と佐々木君が田端先生に呼ばれた。

結構多いプリントを持っている。

「これ、僕のデスクの上に運んどいてくれる？」

そう言われて、私は半分を持つと手と手を伸ばす。

「俺が全部持つから」

横から全てのプリントが持つていかれる。

佐々木君だ。

でも、それでは私の仕事が無くなってしまう！

「私も持つよ！頼まれたわけだし」

何もしないのは悪いし。

半分奪い取るうとしてしていると、佐々木君が言った。

「じゃあ、俺についてきてよ。一人じゃ寂しいし？」

そんな提案に、意味はあるのかと迷ったが、そうすることにした。

「あのさ、…今日も一緒に帰れる？」

手のプリントに視線を落としながら、佐々木君は言った。

「宮城さんと帰るのが楽しいんだ、俺」

どうかな？と首を傾けて聞いてくる。

いつも一人で帰る私に、断る理由はないし…。

昨日も途中で戻っちゃったし…。
多分今日も先生のところへ行っちゃって、話す内容も無いだろうし。

「別に、いいよ」

「お！よかつた〜、昨日で嫌われたかと思った」
ほうつと息を吐いたあと、佐々木君は笑った。

職員室へ行くと、田端先生が座っていた。
読書をしているようだ。

なにか用事があったから、プリントを頼まれたと思っていたから驚いた。

「お、ありがとうな。」

プリントを置くと、そう礼を言われる。
全部運んできた佐々木君に向けてだった気もするが、嬉しいからよししよう。

佐々木君もさつきから機嫌が良さそうだ。

そして昼休み。

ぱたぱた音が聞こえるところと思ったら、古川さんだった。

「お弁当、食べよう〜！」

少ししか話したことが無かったのに、お弁当を食べる仲まで発展するとは……。

いや、本当に発展しているのだろうか！？
よく分からないけど、とにかく嬉しいのだ。

「古川さんはさ、どうして急に話しかけてくれるようになったの？」
避けられてはいなかったけど、全く話したことがなかった。
「気まぐれかもしれない。」

だったら、少ししたら来てくれなくなるんじゃないか。

そう思うと、不安になる。

紙パックのストローに口をつけていた古川さんが顔をあげる。

「んと、圧力がなくなった、みたいなの？」

「…あつりよく？」

うん、そう言つて更に話を続ける。

「綾瀬さん達の空気、つていうか、雰囲気、遙ちゃんと仲良くするなつて感じだった。」

気まずそうに、教室の隅を盗み見る古川さん。

「でも最近、そこまで険しくなくなつたかなつて。だからだよ」
そのあと古川さんは、気のせいかもしれないけど、とつけたした。

「それに、話してみたかつたんだよね。いつも生物のテストすごいし」

「あは、ありがと……古川さん」

どう呼んで良いかわからないから、取りあえず“古川さん”と呼ぶと、

彼女はむつとしてから、微笑んだ。

「凜でいいよ、もう友達…でしょ？」

友達、そう言われて、すごく嬉しくなつた。

名前で呼び合う仲、小さい頃はそれは当たり前だった。

けど成長するにつれて、どんどんグループが固まっていって、私は追いつけなかつたのだった。

多分。

つまり久しぶりで、懐かしくて、嬉しいのだ。

「！…うん、凜、ちゃん」

その後は、授業間際までありふれた会話をした。
いつもより短い休み時間。……これが青春か…。

面倒なS H Rが終わり、放課後になる。
いつも、教科書を片付けつつ、どうにか職員室へ行く口実を考えていた。

ちよつとでも田端先生を見たいから。

しかし、昨日のこともあるし、今日は佐々木君を優先してあげようかな。

と、考えていると佐々木君が笑顔で駆けてきた。（狭い教室で走っちゃだめなんだぞ！）

「宮城さん！帰ろう！」

そう言われて抱えようとした、カバンが消えた。

それはいつの間にか佐々木君の片方の肩に掛かっていた。

「よし、帰ろう！」

「あわわわ、う、うん」

多少強引に引つ張られながら教室を出た。

「今日、古川さんと一緒だったな。」

道端で、にこにこの佐々木君はそう言った。

嬉しかったことだから、私もにこにこだ。

「うん、友達になったんだよ」

「お、よかったな」

「へへ、今日一番嬉しかったこと、かな」

「そっか、俺も嬉しい」

頭を軽く撫でられる。

普段気にしないが、佐々木君の手は大きくて、男の子だなあと実感する。

和やかな雰囲気、気付けばもう家の前についていた。

「ありがと、じゃあまた明日ね」

「うん、俺こそありがと。はい」
カバンが手渡される。

今まで持って貰っていることさえ忘れていた、ちょっと申し訳ないなあ。

手を振りながら帰って行く佐々木君に一応礼をしといた。

結構離れてもまだ手を振っているようだ。

……見えなくなるまで振るつもりだろうか。
ドアノブを回して、半分くらい玄関に入る。

……まだ振っている。

居間に入ると、兄がしょぼんとしていた。

……なぜ体育座り……。

背中から声をかけてみる。

「ど、したの？」

「……もうそんな歳か……。そうか……」

「兄ちゃん……？」

ぶつぶつ言つてて気付いてないみたい。

兄のせいで部屋までじめじめして見えるぞ……。

「……兄ちゃんは用なしか……」

はやく気付け、バカ兄貴！

肩を掴んでゆすつてみる。

「おーいー!!」

びくつと兄の肩が跳ね上がった！

「わああ！遙！いたのかっ」

手をわたわた動かす、混乱しているのだろうか。

仕舞いにはひっくり返ってしまった。

そして急に立ち上がって部屋まで階段を駆け上がっていった。

テスト？（前書き）

兄をどうしようか困ってきました（><）

テスト？

「お願いがあるんだけど……、いい？」

いつも通り遅い登校で、教室へ入ると凜ちゃんが近づいてきた。手に何かテキストを持っている。

その白の中に緑のやつは…生物か……。

「あのね、いつも遙ちゃんに教えてもらって悪いから、たまには先生にも質問しにいこうと思うんだ。」

凜ちゃんのテキストには、沢山のふせんが貼り付けられていた。そんなに勉強しているのに……。

凜ちゃんは話を続けた。

「でも、一人で職員室ってなんか嫌なんだよね。だから遙ちゃん一緒に来てくれない？」

「え」

お母さん、とうとう私にも、友達と職員室に行く日が来ました！
更に田端先生に会える！

「いいよ、行こう！」

とはいえ、もう時間が約10分しかないので昼休みに行くことにした。

SHRまでには、トイレに行く時間くらいならまだある。

席をたち、早足ですませてくることにした。

手っ取り早く、一番近くの個室に入る。

そういえば、一人になりたての時は、よくトイレで過ごした。

友達がいないときは、周りの人に同情されていると思うと恥ずかしくてたまらなかった。

だから、この一人の空間に逃げ込んだものだ。
最近では、慣れてしまつて本を読んでいるけど。

そろそろだ、と個室から出ようとしたとき。

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

綾瀬さんたちだ。

あまり話さなくなったが、会うのはなんとなく微妙だな。

もうすぐ時間だし、すぐ出て行くだろうから隠れることにした。

「……嫌われたかな、佐々木に」

「多分……。最近素っ気ない感じしない？」

「シヨック」

佐々木君が…なんたらかんたら……？

盗み聞きするつもりはないし、そこまで聞こえないけど…。

なんだか罪悪感。

はやく教室に戻りたいな……。。

私の思いとは裏腹に、彼女たちは話続ける。

化粧でも直しているのだろうか、もう出たしまおうか。

遅れると目立ってしまう。

「まさか佐々木に見られるなんて」

「宮城さん宮城さん、つてうるさいよね」

「なんか、佐々木好きなの馬鹿馬鹿しくなってきたし」

自分の名前が出て、心臓が跳ね上がった。

人の話に自分が出てきたときって、どうしてこんなに反応しちゃうんだろ。

「…佐々木のこと悪く言わないで！」

突然。

怒ったような、けれどどこか悲しみが混じったような声がした。トイレは狭いから、それは奥の壁まで響いただろう。

一瞬、空気が凍り付いて、しんと静まりかえった。

「瑞紀……」

「う、ごめん、…そんなつもりじゃ、なかったん、だけど……」

瑞紀みずき、とは綾瀬さんのことだ。

ずっと綾瀬さんだったから、私にとってはあまり慣れない名前だけだ。

さっきの怒声は綾瀬さんのだったらしい。

他の女の子達の声は、とても小さくて分からない。

「……諦めない、佐々木の目に遥はるかなんか映ってても」

「佐々木があんま話してくれなくなったのは……、遥のせいだ……」

教室へ入ったのは、本当にギリギリ。

綾瀬さん達が出て行って、少し時間をおいてから出たから。

廊下には生徒が一人もいなかったため、心臓がひやりとした。

……間に合ってよかった。

古文の教科書を適当に開ける。

それにしても、最後に聞こえたことは、どういうことだろう。

佐々木君が話してくれなくなった？私のせい？

……よく分からないけど、私が本当に原因だったら。

嫌なことをされたけど、綾瀬さんに悪い、かもしれない。

さっきだつて佐々木君を庇っていた。
きつと大好きなんだろうな。

ど、どうすればいいだろう。

なにか案はないかと頭をひねらせてみる。

そして下を向くとノートが目にとまり、授業中だったと気づいた。
先生の声が耳に入る。今まで全然聞こえていなかった。
いつのまにか黒板には色々書かれていて、まずは真っ白なノートに
写さなければいけなかった。

佐々木君のことは放課後、本人に聞いてみるとしよう。

その後は退屈に授業が続き、昼休みがやってきた。

「遙ちゃん！行こう！！」

質問量が半端無いらしく、無理矢理お弁当を飲み込まされた。
おかげでなんか変な気持ちだ。

「失礼します」

職員室、凜ちゃんの後ろから、田端先生の席を見る。

（職員室に入ると常にチエックするから、もう場所は記憶済みさ）
昼休みが始まって、まだ5分と経たないから、大方の先生は昼食中。
こんな時まで説教をしている先生、ごくろうさんです。

田端先生はパソコンと向き合いながら、もぐもぐしている。
体育祭の時は、気持ち沈んでいて、隣で食べている先生をあまり
見ていなかった。

だから、ちよつと膨らんだ口を動かす先生は新鮮だ。

「田端先生、今…いいですか？」

凜ちゃんが、デスクの隣で声をかける。

「うお、はい。……ちよつと待つてな。」

まだ少しおかずが残っている弁当箱を片付ける。

顔に似合わず(?)、持っている物が可愛いキャラクターもの。

弁当箱にも、小さいくまが散らばっていた。

そして先生は、机にスペースを作ってくれた。

生物のテキストを見つけたようで、それを置いていいよということだろう。

凜ちゃんも気付いたらしく、テキストを開けて置いた。

さりげない気遣い、そういうところも好きです。なんてなんて〜

質問が終わったのは、授業まであと何分かという頃だった。

真剣に答えてくれていた先生の説明は、いつもより分かりやすかった。

凜ちゃんも途中で、おお、とか、なるほど、とか、連呼していた。

「ありがとうございます、すっきりです〜…あ、すみません、手間かけてしまって。」

ぺこりとお辞儀する凜ちゃん。私もつられてぺこり。

すると、先生は頭を掻きながら、

「いや、いいですよ。手間のかかる生徒程教え甲斐がありますし
そう笑顔で言った。

……もしかして手間のかかる生徒の方が好きだったりするのだろうか。

そう気になった私は、帰り際に無意識に尋ねていた。

「先生は、質問が多い生徒の方が好き…ですか？」

そう言つと、田端先生は少し驚いた顔をした。

「……、確かに質問しにきてくれるのは嬉しいな。それで成績が上がったら、頑張ったなって思ふなあ。俺は。」

「そうですか……。」

質問をほとんどしない私は……、どうなんだろうか。

だってだって、解説見ても、考えても分からない場合だけいくのが質問だつて思ふんだもん。

前からそうだから、すっかり定着しちゃってるし……。

しゅんとしていたのが出ていたのかもしれない。

その後に、先生は付け加えてくれた。

「まあ、一人でやるやつも頑張ってるなと思うから。ぼんと頭に手が置かれる。」

「よく勉強してます、よしよし」

そう言った先生に、無邪気な笑顔でなでなでされた。なんとなく子供扱いされているんだよなあ……。

職員室を出ると、凜ちゃんが待っていてくれた。

「何かあつた？」

「ううん、なんでもないよ」

撫でられたことは、大切に胸にしまっておこう！
やっぱり田端先生が好きだと再確認したかも。

そして

放課後で。帰り道で。やはり隣には佐々木君で。

忘れかけていた、朝のことをそれとなく聞いてみる。

「最近さ、綾瀬さんたちとさ……話す？」

「……ああ、あんまり話してないなあ。」

興味がなさそうに、佐々木君はそう言った。

相手につまらない話をするのは苦だけど、頑張ってみるよ！

「綾瀬さんたち…、話したいんじゃないかな？」

「……………」

…佐々木君は、少し黙り込んでしまった。

怒らせた？私のせいなのだろうか？

「あ、あの、……………変なこと言っでごめ……………」

「俺は嫌だな。」

……………えええ

「宮城さんに嫌なことしただろ、…ちょっとなあ」
隣には少しむっとした顔があった。

「あ、私のせいかな…？」

「いやいや、あいつらの自業自得、だろ。」

気にしすぎ、そう言っって頭をぽんぽん、とされた。

「宮城さんに嫌な奴って思われたくないけど……………、やっぱり許せないんだよな。」

佐々木君は、しょぼんとしたような、怒っているような、複雑な表情をしていた。

うつうつ、こういう時、なにを言えばいいか分からない。

「…やな奴とは思わないよ……………」

それだけ小さく言っっておいた。

「それにしても、他の女子と話したらとか、ちょっと傷つくなあ？」
別れ際、佐々木君はわざと頬を膨らまして、そう言った。

その言葉の意味はよくわからなかったけど、私達は笑顔でバイバイして離れた。

兄と勉強会！

佐々木君と下校した後、もうすぐのテストにむけて、リビングで勉強。

生物、といきたいところだけど、今日は古典でもしよう。

古典の教科書を広げる。

「……………意味わからん……………」

古典は読みにくいし、分かりにくいし。

私は、古典が苦手。

「お、勉強かあ。えらいえらい。」

問題とにらめっこしていると、兄ちゃんが嬉しそうに近づいてきた。

「でも全然、わかんなくて……………」

「よし、兄ちゃんが教えてやろう。」

「やったー」

「俺国語は好きだからなあ、見せてみ」

やけに嬉しそうに隣に座る兄。

どこからか眼鏡を取り出してかける。

「じゃあ、ここ。これはどどういう意味？」

私は文章中の分からない単語を指さし、兄はそれに目を向けた。

「ん、単語の意味から分からないのか？」

「……………うん、まあ」

古文は本当に駄目なの。

全然やる気が出ないんだもんなあ。

「遙、これは覚えるしかないぞ？」

「えー…」

「…こりゃ特訓だな」

兄ちゃんも一緒にやってやるからと言って、その日はみっちり古文
漬けになった。

「あー、どう覚えたらいいのー」

「兄ちゃんはとにかく書いて覚えてな、書け書け」

「うー…」

「よしよし頑張れ」

兄ちゃんはよく頭を撫でて励ましてくれる。

自分も忙しいのに私についていてくれる兄には、本当に感謝してい
る。

私なりに頑張っているつもりなんだけど…。

でも…、古文は嫌いだなあ。

「…………ああ駄目だ、もう寝る」

深夜2時。

兄がお茶を取りにいつている間に私は力つきた。

古文単語はまあまあ覚えられたような。

*

「遙ー、お茶。…て、寝てるし」

俺が居間に戻ると、妹はいつのまにか机に突っ伏していた。

「ああ、もうこんな時間だったか。」

時計を見てだいぶ時間が経っていたことに気づいた。

そういえば、たまに頭がこくこくしてたか。

ちよつと頑張らさせすぎたかもな…。

近くにあったブランケットを遙に掛けてやる。

何も考えてなさそうな寝顔に俺の頬は緩む。

「こついうところ、放つとけないよな。」

起こさない程度に軽く頭を撫で、思わず抱きしめそうになった自分を抑えた。

「何やってんだ俺」

俺は兄貴なんだ。

そうなんども言い聞かせてきただろ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5499p/>

あの空まで届け

2011年12月28日23時48分発行